

2018年度 私立大学図書館協会 海外派遣研修  
モートンソンセンター・アソシエイツプログラム  
および 米国図書館協会 (ALA) 年次大会 参加報告書

2018年9月26日  
神奈川大学図書館 平塚図書課  
永沼 知之

## 本報告書の構成

1. はじめに
2. 参加動機・目的
3. モーテンソンセンター・アソシエイツプログラムの概要
4. 受講プログラムの内容
  - ①図書館サービスの情報収集
  - ②リーダーシップを発揮する方法(ワークショップ)
  - ③海外の図書館員との交流
5. 米国図書館協会 (ALA) 年次大会
6. おわりに

## 1. はじめに

私立大学図書館協会の海外派遣研修制度を利用し、2018年5月23日～6月19日の期間、米国イリノイ州にあるイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で実施された「モーテンソンセンター・アソシエイツプログラム」に参加した。また、2018年6月21日～6月26日の期間、ルイジアナ州ニューオーリンズにて開催された「米国図書館協会（ALA）年次大会」にも参加した。本報告書では、モーテンソンセンター・アソシエイツプログラムおよび、ALA年次大会について報告する。

## 2. 参加動機・目的

私が今年度の海外派遣研修に参加しようと考えた理由は、自身の図書館員としての専門性を高めたかったためである。私は2014年4月に神奈川大学横浜図書館に配属され、閲覧業務の統括部署にて3年間の経験をした後、人事異動により神奈川大学平塚図書館（現部署）に配属された。大学図書館員としての経験は今年で5年目となる。本研修制度を知った経緯は上司からの提案であったが、当初は経験年数が浅く図書館全体の知識が十分とは言えない状況での参加にためらいを感じていた。しかし、図書館先進国の米国で様々な国の図書館員とともに1ヶ月間学ぶ機会は、日本国内では経験できない貴重な機会であり、図書館員としての視野を広げることのできる良い機会だと考えたため研修参加を希望した。これまでの業務内容はパブリックサービスに関する部分が大きかったため、図書館の利用促進という観点から、現場におけるサービスの現状や施設設備の使用法の工夫について情報収集をしたいと考えていた。また、海外の図書館員との交流を通して、世界の中で日本の図書館がどのような立ち位置にあるのかを認識する機会になることを期待し、研修に参加した。

## 3. モーテンソンセンター・アソシエイツプログラムの概要

モーテンソンセンターは1991年に設立され、これまでに90か国以上から1300名を超える修了者を出す世界を代表する図書館員のための研修センターである。ミッションとして「国際的な教育、理解、平和を促進することを目的に、世界中の図書館と図書館員の繋がりを強化すること」を掲げており、センターが行った優れたレクチャーをWeb上で無償公開したり、発展途上国に対しては情報アクセスを容易にするための工夫や、現地の図書館員に対して現状のサービス改善に役立つトレーニングプログラムを行うなど、その活動範囲は幅広い。モーテンソンセンター・アソシエイツプログラムは、モーテンソンセンターが実施している研修プログラムのひとつであり、年度ごとに世界各国から参加者を募集している。今年度のプログラム実施にあたって設定された目的は、以下のとおりである。

### ① 米国における図書館サービスの情報収集を行うこと

図書館先進国である米国における図書館サービスの現状を知ることで、研修参加者が自館の図書館サービスと比較し、改善に役立てられる機会を提供する。研修中は、様々な館種の図書館（大学図書館、公共図書館、専門図書館）を見学する機会に加え、現地の図書館員による図書館業務に関するセッションを行う。

## ② 図書館員として、組織でリーダーシップを発揮する方法を知ること

国や地域によって抱えている問題は異なるが、図書館は利用者に対してサービスを提供し続ける義務がある。研修中は、研修参加者が自館の組織内でリーダーシップを発揮し、限られた人員でより良い結果を出せるようになることを目的としたワークショップを行う。

## ③ 海外の図書館員との交流および、国際的な交友関係を築くこと

研修中は米国の図書館事情について知る機会が多くあるが、研修参加者同士が相互に情報共有を行うことで自他の理解を深め、自館のサービスを見つめなおす機会にするとともに、国際的な交友関係を築くことで図書館員同士の強いつながりが生まれることを期待する。

今年度のプログラムには、9か国から10名の研修参加者が集まった。各所属機関は以下の通りである(国立大学8名、私立大学1名、国立図書館1名)。

ヨルダン (University of Jordan)  
オマーン (Sultan Qaboos University)  
コスタリカ (University of Costa Rica)  
ナイジェリア (University of Calabar)  
ナイジェリア (University of Benin)  
シエラレオネ (Njala University)  
ザンビア (University of Zambia)  
ジャマイカ (University of the West Indies)  
韓国 (National Library of Korea)  
日本 (神奈川大学)



研修参加者とモーテンソンセンター前で撮影した一枚

## 4. 受講プログラムの内容

今回の研修では、図書館サービスに関する様々な内容でセッションやワークショップ、視察を行ったため、前述のプログラム実施目的に沿ってその内容を記載する。

### ① 図書館サービスの情報収集

#### ① - 1 イリノイ大学図書館における情報リテラシー教育

研修中は、イリノイ大学図書館における学部生を対象とした情報リテラシーに関するオリエンテーションの方法について話を伺った。オリエンテーションの内容としては、多くの日本の大学が行っているであろう内容と同じであったが、多様なアプローチを用いて学生の注意を引くことに注力していた。特徴的だったのは、クリッカーを使用したリアルタイムのアンケート調査である。私も何度か日本国内の

フォーラムでクリッカーを目にすることがあったが、イリノイ大学では教育現場での使用が定着しているようである。クリッカーはリアルタイムで学生の習熟度を確認することができ、回答結果が匿名で表示されるため回答率も高いという。また、集中力の持続やアイスブレイク的な役割も果たしている。私自身、自分の大学でオリエンテーションを担当することが多くあるが、学生の集中力を持続させるために毎度試行錯誤しているため、この取り組みは非常に効果的だと感じた。その他、パスファインダーの一種である“LibGuides”へのリンクをホームページ内に作成していたり、印刷可能なハンドアウトの他にもショートムービーを作成するなど、オリエンテーション後に学生自身が目的に応じて情報へ容易にアクセスできる工夫がされていた。図書館として学生に必要な情報を可能な限り多く発信しようという姿勢がすばらしいと感じた。

LibGuides

<https://www.library.illinois.edu/ugl/class-page/>

紹介されたビデオ制作ソフト

<https://www.powtoon.com/home/>

<https://www.techsmith.com/video-editor.html>



セッションで使用したクリッカー

## ① - 2 デジタルヒューマニティーズ

デジタルヒューマニティーズとは、人文科学分野の学問を追求するためにデジタル技術を活用するプロジェクトの総称である。たとえば、紙媒体の資料をスキャンした後にテキスト分析を行ったり、データ分析の結果をグラフや数値によって可視化するというものだ。データの可視化という点では、“GIS (Geographic Information Systems)”もその技術のひとつと考えられる。GISとは、地球上の様々な事象に関するデータを地図上に表示することで、データの可視化を可能にするシステムである。日本では「地理情報システム」と呼ばれている（研修中はGISに関するワークショップもあり、実際にグーグルマップを使用して研修参加者の勤務地情報をマッピングする作業を行った）。GISを活用することで、人口の増減率や施設を新設するのに適した場所を表示するといったことが可能になるため、最近ではデータ分析の手法の一つとして様々なシーンで使用されることが多いという。このように、人文科学分野の問題を解決するためにデジタル技術を使用することは、新たな視点や知識を得ることに非常に役立つ。イリノイ大学では、図書館内（Main Library）に“Scholarly Commons”というスペースがあり、主に教員と大学院生を対象にデジタルヒューマニティーズに関する分野を中心とした研究支援を行っている。Scholarly Commonsでは、高性能なPCやスキャナを設置しているだけでなく、図書館内外から専門知識

を持ったスタッフが集まり支援にあたっている。デジタルヒューマニティーズの研究支援に関するイリノイ大学以外の事例については、オハイオ州立大学の中にある“Research Commons”が印象的であった。Research Commons では、多数設置されたセミナールーム内でデジタルヒューマニティーズ等の最新技術に関するガイダンスを行っている（利用者はガイダンス内容に関する質問を Web 上で送り、さらに深い知識を得ることが可能）。また 9 時～19 時までは IT スペシャリストというスタッフが在駐しており、専門的な質問にその場で回答できる体制が整っている。こうした図書館の支援体制から、技術の進歩に伴う研究領域の多様化と、それに応じた図書館サービスのニーズの広がりを感じることができた。



イリノイ大学 Scholarly Commons での一枚。改修予定があり、図書館が考案した空間デザイン案を掲示して利用者の意見を集めている。



オハイオ州立大学 Research Commons での一枚。グループ学習室があり Web 予約が可能。部屋の扉に設置されたタブレットで予約状況を確認できる。

### ① - 3 米国図書館における資金調達手段

日米の図書館で一番大きく異なっていたものは、資金調達の方法であった。研修中は様々な館種の図書館を見学したが、どの図書館においても資金調達について尋ねると外部団体から寄付金を受け取っていることがわかった。研修先であるモーテンソンセンターもまた、C. Walter 氏と Gerda B. Mortenson 氏による多大な寄付によって設立されている。米国において寄付が一般的な資金調達手段であることを実感したきっかけは、シカゴ公共図書館の視察を行った際、街中に寄付を募る内容のポスターが貼られていたのを見つけたことであった。ポスターにはポップなデザインが使われており、自然な光景として街に溶け込んでいた。個人的な感覚として、外部団体に寄付を依頼することはハードルの高い行為であり、ポスターのような大勢の人の目に触れる方法で大々的に広報を行うことには抵抗感があった。しかし、米国において寄付を求めることはごく自然な行為であり、企業にとっても寄付をすることが社会貢献や知名度アップにつながるという考えを持っているようである。資金調達の手段として寄付が一般的であることは、今回の研修の中で私が感じた一番大きな文化の違いであった。寄付を獲得するための方法は、まず出資者とコンタクトをとり信頼関係を築くこと、そして自分たちの行っている事業を説明し、資金調達が必要な理由を明確に伝えることである。出資者に寄付の依頼を行うステップ (Proposal) は、資金調達において最も重要なため、ウェブ上でセミナーを受講できるサイトも存在している (<http://grantspace.org>)。

最近では、日本においても外部から資金を募る「クラウドファンディング」を行う事例を耳にすることがある。資金調達の方法としては主流ではないが、今後少しずつ事例が増えていくことで日本においても文化として浸透していけばよいと思う。



街中で発見したシカゴ公共図書館への寄付を募るポスター



オハイオ州立大学トンプソン図書館での一枚。寄贈団体名が印字されている。

“GIFT OF INGRAM-WHITE CASTLE FOUNDATION”

#### ① - 4 Maker Space について

“Maker Space”とは、3Dプリンターやレーザーカッター等のハイテク機器を設置したスペースを指す言葉であり、「ファブラボ (Fablab)」や「ハッカースペース」等がその一部として知られている。最近では、日本でも Maker Space が多くなっており、私の勤める神奈川大学湘南ひらつかキャンパスにも「ファブラボ平塚」という施設があるが、Maker Space が図書館内にあるということについて米国図書館の現状には興味があった。今回の研修では館種を問わず多くの図書館を見学したが、驚くべきことに大小の違いはあるものの殆ど全ての図書館が Maker Space を設置していた。その中でも特に印象に残っているのは、シカゴ公共図書館の“YOUmedia”である。YOUmedia は、2009年に Harold Washington Library Center の1階に設置された非常に広い Maker Space である。若年層をターゲットに、グラフィックデザイン、2D/3D デザイン、ビデオ・音楽制作など幅広い分野の創作活動を行う環境を整備しており、学校外で自分の興味のある分野の知識・スキルを修得するための支援を行っている。YOUmedia を訪れた利用者同士が、互いの興味のある分野を越えた交流をすることで学習効果を高めることもねらいであり、そのための環境づくりとして室内は仕切りのないオープンスペースになっている。また、Harold Washington Library Center の3階には“Maker Lab”という別の Maker Space があり、市民に対してモノづくりワークショップのようなイベントを行っている。図書館見学中に紹介された Maker Space は時間の関係で見学しかできなかったが、“TechHub”というイリノイ大学に設置されている Maker Space では実際にハイテク機器を操作する機会が与えられ、初めて操作する機器に新鮮さと高揚感を感じながら楽しいひと時を過ごすことができた。

## YOUmedia (シカゴ公共図書館)



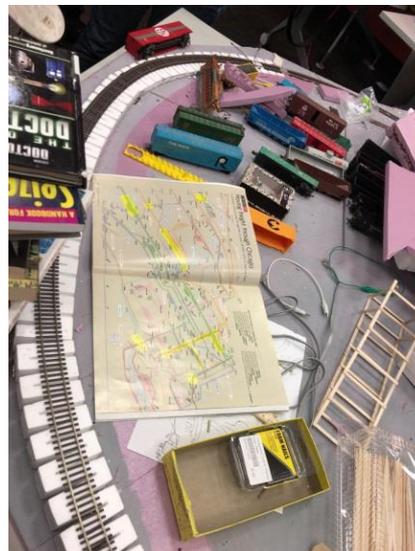
テレビゲームをプレイするためのモニターとエレキギター。ソファに座りながら遊ぶことができる。



音楽製作のための作曲・録音ブース。4名以上入ることはできず、飲食は禁止。事前予約ができる。



解体された PC の本体。解体と組み立てをセットで行うことで PC の構造を学ぶことができる。



鉄道路線図とレール模型。作成したレールは持ち帰りできないが、組み立てに必要な材料は無料。

## Maker Lab (シカゴ公共図書館)



3D プリンターやレーザーカッターを使用して作成したグッズが展示されている。

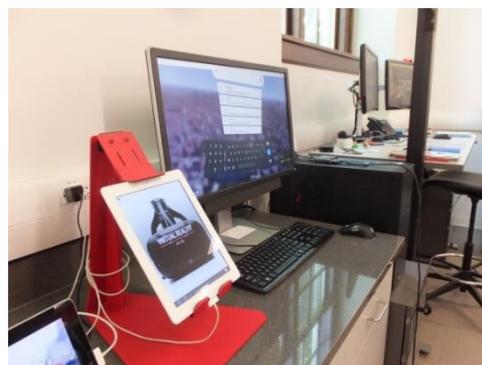


自由に利用できる 3D プリンター。  
30分ごとに1ドルの使用料を徴収している。

## TechHub (イリノイ大学)



レーザーカッターを使って、段ボールや木材をカットしたもの。



ヴァーチャルリアリティ (VR) 体験ができるゲーム。  
専用ゴーグルとコントローラーを使用することで、自分がゲームの中に入ったような感覚でプレイすることができる。



360°カメラを使用して撮影した写真。  
以下のリンク先の画像をクリックするとマウスのスクロールで動かすことのできる 360°写真になっている。

<https://photos.app.goo.gl/96jwbo36dFpfojDR6>

YOUmedia (シカゴ公共図書館)

<https://www.chipublib.org/programs-and-partnerships/youmedia/>

Maker Lab (シカゴ公共図書館)

<https://www.chipublib.org/maker-lab/>

TechHub (イリノイ大学)

<https://citl.illinois.edu/citl-101/instructional-spaces-technologies/armory-innovation-spaces/illinois-innovation-sandbox>

### ① - 5 資料保存スペースの工夫

膨大な資料を保存するための施設として、集密書庫の見学をする機会があった。イリノイ大学には 2004 年に建造された “Oak Street High Density Storage” という巨大な集密書庫があり、イリノイ大学図書館で利用の少ない資料が保管されている。巨大な施設ではあるが、限られたスペースを有効活用するために、資料の分類ではなくサイズで管理するという合理的な方法をとっている。施設内は資料保存に適した環境を維持するために、気温約 10°C (50°C Fahrenheit)、湿度 30%を保っており、施設内は夏場であっても上着が必要なくらい肌寒い。施設内に設置されている書架は非常に高く、一番高い書架は高さ 12 メートル (40 フィート) もあるため、出納の際には専用のリフトを使う必要がある。出納作業は危険が伴うため施設の職員が行っており、利用者が直接書架を確認することはできない。保管されている資料はそれぞれにバーコードが付与されており、OPAC を介して検索できるようになっている。集密書庫に資料を移すことによって、大学図書館は限られたスペースを節約し、利用者に資料を探しやすい環境を提供している。なお、保管場所を移された資料も OPAC を通して検索ができるようになっているため、利用者は必要な時に資料にアクセスすることが可能である。また、施設内に保存されている資料の多くは電子資料として閲覧することも可能である。

同様の施設は、研修中に訪れたシカゴ大学の “The Joe and Rika Mansueto Library” でも見学する機会があった。この図書館は 2011 年に建造された外観が非常に特徴的な施設で、閲覧スペースの天井部分がドーム型のガラスになっている。建物の地下部分を集密書庫として利用しているため閲覧スペースを広く確保することができ、スタイリッシュな図書館という設立時のコンセプトを守ることができている。

Oak Street High Density Storage

<https://www.library.illinois.edu/oak/high-density-storage/>

The Joe and Rika Mansueto Library

<https://www.lib.uchicago.edu/mansueto/>



Oak Street High Density Storage の外観。図書館 (Main Library) からは少し離れた場所にあり、移動にはバスを使用した。



建物内の様子。天井が非常に高く、巨大な防火扉があり保存することに特化した倉庫という印象である。



The Joe and Rika Mansueto Library の外観。学生がインスタグラム等に写真を投稿するため、「セルフリースポット」という案内板を路上に設置している。



施設内部の様子。ほぼ全ての閲覧席が埋まっていた。ラーニングcommonsは別の図書館に設置されているため、施設内はとても静かであった。

## ① - 6 Undergraduate Library

“Undergraduate Library” は、1969 年にイリノイ大学の学部生が利用することを目的に設置された図書館であり、1 年～2 年生の研究に必要な資料を多く揃えている。今回の研修先であるモーテンソンセンターも Undergraduate Library の中に設置されている。研修中は訪れる機会が最も多く自由に館内を見学することができたため、館内の様子やサービスの一部を紹介する。まず、施設の構造として特徴的なのは、図書館全体が地下に作られていて入り口のみが地上に出ていることである。農学部を有するイリノイ大学では、コーンや大豆といった農作物を育てているため、高い建物によって日光が遮られることを

避けるために、こうした作りになっているという。図書館内にはグループ学習用のスペースが確保されており、学生同士がディスカッションをしながら学習できる環境が整っている。図書館内で利用できる設備は、日本の図書館よりも充実しているように感じた。例えば、リフレッシュスペースにはボードゲームやパズル、ビデオゲームができるブースが設置されている。視聴覚資料も各国の映画やアニメーションなど豊富にそろえており、学生からの購入希望も受け付けている。購入希望を受ける基準について確認したところ、資料収集の目的としてポップカルチャーの学習という側面もあるため、ほとんどの場合はリクエストを受け付けているという。ちなみに、視聴覚資料は1週間の貸出が可能である。その他の設備として驚いたものは、映像作成用のブースや音楽の録音スタジオがあったことである。また、館内に質問掲示板を設置し、案内用のタブレット端末を設置するという利用者サイドに立った配慮もされていた。

Undergraduate Library では、情報発信の手段としてソーシャルメディア (Twitter, Facebook, Instagram) を使用しており、その中でもとりわけ学生の利用率が高い Instagram を活用して情報発信を行っている。具体的な活動として紹介された興味深い取り組みは、“Find Uggles” というものである。Uggle は Undergraduate Library のマスコットキャラクターの猫である。Find Uggles は、大学内のどこかに Uggle の写真が貼られたパネルが隠されており、それを見つけた学部生に現金 10 ドルが与えられるというイベントである（報酬の受取は一度のみ）。イベントは週ごとに開催され、パネルは毎週月曜日に設置される。希望者は、今週の Winner として Instagram に紹介される。

Undergraduate Library

<https://www.library.illinois.edu/ugl/>

Twitter

<https://twitter.com/askundergrad>

Facebook

<https://www.facebook.com/universitylibrary>

Instagram (askundergrad)

<https://www.instagram.com/uillinoislibrary/>

Undergraduate Library Blog (find Uggles)

<http://publish.illinois.edu/undergradlibrary/2016/10/27/find-uggles/>



Uggle の写真 (Undergraduate Library Blog より)。



ビデオゲームのブース。家庭用ゲーム機の最新機種がひと通り揃っている。日本で作られたゲームの人気の高いとのこと。



ポップカルチャーの資料コーナー。マンガ、視聴覚資料ともに日本の作品の占める割合が多いために印象的であった（日本語・英語版あり）。



タブレットを使用した図書館案内。館内マップの表示や資料検索が行える。端末は設置台に固定されている。



館内にあるレコーディングブース。内部は防音加工がされており、楽器を使用したレコーディングが可能。

## ① -7 イリノイ大学図書館の学生協働

研修中は、各自が自分の興味のある分野に精通しているイリノイ大学の図書館員にインタビューをする機会を与えられたため、私はかねてから興味があった学生協働の取り組みについて、Undergraduate LibraryのDavid Henry Ward氏にインタビューを行った。インタビュー内容は以下のとおりである。

**Q** 学生スタッフを雇おうと思ったきっかけは何か（学生に何を期待しているか）。

**A** Undergraduate Libraryは、約20年にわたって学生スタッフ（学部生）と共に働いてきた歴史がある。図書館は学生に対して、学費に充当するための資金を得る機会を提供している。図書館利用者である学

生がスタッフとして働くことで、彼ら自身や彼らの友達がどのように図書館を利用しているかを知ることができるというのが、図書館にとっての利点である。

**Q** 学生スタッフの主な業務内容は何か。また、どのようにして業務を割り振っているか。

**A** 貸出・返却・配架といった基本的な閲覧業務をさせているが、通常よりも煩雑な手続きが必要な機器の貸出手続きを担当するスタッフもいる。また、利用者からの簡単な質問に回答させることもあり、即答できない質問については職員に伝達させている。業務の振り分けは学生スタッフの習熟度によって決めているが、彼らが全ての業務をバランスよく行うことができるよう、可能な限り一つの業務を長時間同じスタッフが行うことは避けるよう心掛けている。

**Q** 学生スタッフをどのようにトレーニングしているか。

**A** 学生がシフトに入る前にオリエンテーションを行い、その後は週ごとにトレーニングを行っている。また、図書館職員が学生スタッフを管理するためにスタッフ wiki を作成し、さらにはオンライントレーニングプログラムで週ごとに学生から寄せられた質問に回答、学生スタッフに必要な業務スキルを上達するための研修に関する情報や、図書館のポリシー、サービスの更新といった情報を配信している。また、今後は経験豊富な学生が新しいスタッフを指導する学生指導チームを組織することも検討している。

**Q** 学生スタッフがイベントを提案することはあるか。また、彼らの提案はどの程度採用されるのか。

**A** 学生スタッフが Undergraduate Library のコレクションやサービスについてアイデアを提案してくれることもあるが、実際のところ彼らの提案を広く募集するようなシステムはとっていない。現時点で意見交換の場としてあるものは、年間を通した活動の振り返りミーティングだけである。

**Q** 私の図書館でも学生スタッフを採用することが決まったが、彼らと共に働く上で何か心がけるべきことはあるか。

**A** 私たちは学生と一緒に働けることを楽しく思っているし、彼らの意見をサービスに取り入れることは価値あることだと感じている。熱心な学生スタッフは、彼らの友達が図書館を利用する際の助けになるような良いサービスを提供している。ほとんどの大学生にとっては、大学でのアルバイトがはじめての職場経験となるため、私たち職員は彼らに対して仕事をする上での基本的なマナーやスキルを教える必要があると考えている。具体的には、時間通りに働くこと、問い合わせに対して期日を守って回答すること、自分の不在時に周囲に迷惑がかからないよう予め準備をしておくことを教えている。

## ① - 8 ブログ作成 (研修中の課題)

研修中は、研修内容の復習をかねて各自がブログの作成を義務付けられ、各週に 1 回ずつその週で印象に残った出来事について記事を投稿し、最終週には研修全体を通して学んだことについて記事を作成した (計 6 回分の記事を作成)。ブログの作成に当たっては、ALA の一部である LLAMA (Library Leadership & Management Association) が提唱している“LLAMA's 14 Foundational Competencies”との関連性を示すことが求められた。これは、図書館員がリーダーシップを発揮するために必要とされる能力を箇条書きにしたものである。研修参加者のブログは、すべて Web 上で公開されている。

研修ブログ

<https://mortensonassociatesprogram.wordpress.com/>

LLAMA's 14 Foundational Competencies

<http://www.ala.org/llama/leadership-and-management-competencies#Introduction>

## ① - 9 図書館視察 (施設一覧)

<大学図書館>

- ・イリノイ大学アーバナシャンペーン校 (University of Illinois Urbana-Champaign)
  - Undergraduate Library
  - Main Library
  - Oak Street High Density Storage
  - Grainger Engineering Library (IDEA Lab)
  - TechHub
  
- ・オハイオ州立大学 (Ohio State University)
  - Research commons
  - 18<sup>th</sup> Avenue Library
  - Thompson Library
  
- ・シカゴ大学 (University of Chicago)
  - The Joe and Rika Mansueto Library
  - Regenstein Library
  
- ・パデュー大学インディアナポリス校 (IUPUI Library)

## <公共図書館>

- ・シカゴ公共図書館 (Chicago Public Library)
- ・ウェスターヴィル公共図書館 (Westerville Public Library)
- ・アーサー公共図書館 (Arthur Public Library)
- ・インディアナポリス公共図書館 (Indianapolis Public Library)

## <その他>

- ・米国図書館協会本部 (ALA Headquarters)
- ・OCLC (Online Computer Library Center)
- ・Upshot Agency (一般企業 専門図書館)

## ② リーダーシップを発揮する方法 (ワークショップ)

### ② - 1 DiSC アセスメント

「DiSC アセスメント」とは、職場におけるワークスタイルのパーソナリティ診断である。ワークショップでは、仕事への向き合い方に関する数十個の質問項目に回答し、研修参加者それぞれが自分の属するタイプを確認した。診断結果は大きく以下の4タイプに分けられ、人によっては複数タイプの特徴を持つこともある(私は「着実」と「慎重」の特徴を持つSCタイプであった)。通常の性格診断とは異なりDiSCアセスメントの結果に優劣は存在せず、ワークショップでは自他分析を通して互いの特徴を理解し、衝突を避けてより良い結果を導く方法を考えることが重要であることが強調された。

#### ・主導 (Dominance)

意志が強く行動力があり、成果を重視する傾向がある。挑戦することを恐れない姿勢がチームメンバーをリードすることが多いが、時としてその強引さが衝突を招くこともある。

#### ・感化 (influence)

楽観的で熱意にあふれ、他者との協力を重視する傾向がある。チームメンバーの意見を積極的に取り入れ、周囲が行動するための士気を上げることを得意とするが、人とのつながりを重視するため、否定的な意見を伝えることに苦労することが多い。

#### ・着実 (Steadiness)

辛抱強く人当たりの良い性格を持ち、着実に仕事をこなすことを得意とする傾向がある。他者との相互理解を通して協力関係を築くことを重視し、チームに貢献することに喜びを感じる。ルールに則って着実に仕事をすることを好むため、リスクのあるプロジェクトや不確定要素の多い環境で働くことに強いストレスを感じることもある。

## ・慎重 (Conscientiousness)

安定的な成果を上げ続けるために、時間をかけて正確に行動する傾向がある。論理的に物事を考えるため、会議の場では問題点を積極的に指摘することが多く行動重視のタイプとは衝突することがあるが、質の高い成果を上げるためには欠かせないタイプである。しかし、分析的で完璧主義な性格によりチームよりも個人で働くことを好むことが多い。

どの組織においても、限られた人員で業務を行わなければならないことは同じであり、自分の考えを押し付けるような働き方では業務を円滑に進めることができないことは誰もが理解している。私自身も組織で働くことの難しさを感じることはあったが、ワークスタイルの種類については漠然と考えるだけで、具体的に分析をしたことはなかった。その点で、具体的なタイプや相性を知ることができたことは、今後の働き方を見つめ直す良い機会になった。ワークショップを通して、他者のワークスタイルを変えることは難しいが、それぞれのタイプを理解することで働く人に合わせて自分のスタイルを変えることはできること、また業務を指示する立場であればメンバー同士の長所を生かすような業務の割り当てを行うことで、より良い結果を導くことができることに気づくことができた。

## ② - 2 FISH 哲学

FISH 哲学は、米国のシアトルにある Pike's Fish Market という魚市場で生まれた接客の心得である。Pike's Fish Market は元々寂れた魚市場で客足も少なかったが、その状況を改善するために従業員が働き方に対する考えをシフトしたことがきっかけで、今では活気にあふれる世界的に有名な魚市場として有名になった。社会人は起きている時間の約 75% を仕事に費やしているというデータがあるようだ。人生の大部分を占める労働時間に楽しみを見いだせないままではもったいない、せっかくなら楽しく過ごそうではないかというのが FISH 哲学の基本的な考え方である。FISH 哲学を実行する上で心がけるべきポイントは、以下の 4 点である。

### 1. Play (遊び心をもって楽しむ)

自分自身が仕事を楽しむ姿勢が一番大切。仕事をする上では、どうしてもマニュアル通りにやらなければならない、期日に間に合わせなければならないと自分を追い込んでしまいがちだが、遊び心を取り入れることによって心に余裕を持たせることができる。心に余裕が生まれれば、自ずと職場の雰囲気も良くなっていくはず。

### 2. Make their day (相手を喜ばせる)

自分ではなく相手に注意を向けること。相手にとって、その日一日が良い日になるような素敵なことをしてあげよう。誰かのために何かをしてあげることが、気持ちの良いことである。自分が誰かのために動いている様子は、他の人にとっても良い影響になるはず。

### 3. Be there (相手に意識を向ける)

目の前の人にしっかりと意識を向けること。接客シーンでは、客の動きによく気を配り、放置することがないように「ここにいてください」と自分から声を掛けに行くこと。「いま忙しいから」ではなく、相手の言っていることに耳を傾けることが大切。

### 4. Choose your attitude (態度を選ぶ)

仕事の内容は変わらないが、仕事に向き合う気持ちは変えることができる。同じ仕事をするのであれば、暗い気持ちよりも明るい気持ちで取り組んだほうが良いはず。どんな態度を選ぶかは人それぞれだが、楽しく仕事をするためにはポジティブな気持ちを持ち続けることが大切。

FISH 哲学は元々魚市場での接客の心得だが、人とかかわる仕事であれば共通して役立つものである。ワークショップの内容は、FISH 哲学とは何であるかという説明に重点が置かれていたため、図書館での実践方法について詳しく聞くことはできなかったが、私自身の現状に置き換えて考えると、“Be there (相手に意識を向ける)” が最も重要ではないかと感じた。私の場合、普段の業務では閲覧業務を外部委託しており、私自身が現場で利用者対応をする機会が少ないため、接客に置き換えた場合の客は同じ職場で働く業務委託スタッフと他の図書館職員ということになる。とりわけ、業務委託スタッフとは現場の状況を確認するため日々の連携が欠かせないが、彼らは職員の指示にしたがって業務を行うため、こちらの確認が遅れた分だけ利用者を待たせることになる。しかし、確認が必要でも職員が話しかけづらい雰囲気を出していたり（実際には意識していなくても、そう感じさせてしまっていたり）、「後にしてください」というようなやり取りが増えれば確認に対する心理的ハードルが高くなり、結果として確認が先延ばしにされてしまう可能性もある。この点については、以前から意識していたため、業務委託からの問い合わせには優先的に対応することを心がけ、職場の雰囲気を和ませるためにあえて仕事に関係ない話をするこももあったが、それがコミュニケーションの有効な手法であることは知らなかった。今後仕事モチベーションを維持しながら働きやすい環境を作るために、これらの要素をより一層意識しながら日々の業務を行いたいと思う。

## ② - 3 SILL (Strengthening Innovative Library Leaders)

“SILL”は図書館員を対象としたモーテンソンセンターオリジナルの研修プログラムで、Leadership, Innovation, Planning, Communication の4つのセクションに分けて通常は2日間で行うものである。今回の研修では、スケジュールの関係ですべてのセクションを行うことができなかったため、多数決により Innovation と Planning に絞って行うことが決まった。ワークショップは10人の研修参加者を2グループに分け、各グループ内でディスカッション後にグループ代表者が発表という流れで行われた。Innovation のセクションでは、図書館内で起こった問題を例に、問題点の洗い出し、解決策の考案、実行計画というステップでディスカッションを行い、セクションの最後に一人一人が実際に抱えている問題に関する Innovation を考えた。Planning のセクションでは、Innovation のセクションで取り上げた各自の課題に対して、「具体的な(Specific)」「測定可能な(Measurable)」「達成可能な(Achievable)」「課

題に対して適切な(Relevant)」「期限を定めた(Time-Bound)」の5点に留意した”S.M.A.R.T goals”の視点に基づき、具体的な行動計画である Action Plan を考案し、課題解決に向けた現実的な解決策を導き出すことで、各自が帰国後に組織で実行できる計画を持ち帰ることができた。

このワークショップは全てグループワークで行ったため、今回の研修で最もディスカッションの多い活動であった。研修参加者は各自が経験豊富な図書館員であるため、時には意見がぶつかる場面もあったが、ディスカッションにおいて相手の意見を尊重することが最も重要であることを再確認する機会にもなった。

なお、このプログラムは Web 上でマニュアル等の各種資料やチュートリアルビデオ等が公開されているため、世界中の人々が自分の国にいながら研修を再現することが可能である。

## SILL (Strengthening Innovative Library Leaders)

<https://www.library.illinois.edu/mortenson-leadership/>

### ③ 海外の図書館員との交流

#### ③ -1 ライブラリーフレンド

研修中は、イリノイ大学の図書館関係者がライブラリーフレンドとして研修参加者に1名ずつ割り当てられた。ライブラリーフレンドとは初回の自己紹介時にランチタイムが設けられ、その後は必要に応じて個別に連絡を取り合うことが許された。以下、私のライブラリーフレンドについて紹介する。

### Joshua Harris 氏 (Media Preservation Coordinator)

8年間、視聴覚資料の保存・修復のスペシャリストとしてイリノイ大学に勤めている。米国の図書館でも彼のような人材が図書館にいることはめずらしく、雇用のために高い賃金が必要なため、彼と同じ職種のスタッフはイリノイ大学にはいないという。主な業務内容は、古いフィルム等の記録媒体の修復や記録内容のデジタル化である。資料収集のために世界各国に出向くことも多く、収集範囲は資料庫に保存されているものから個人のガレージにあるガラクタまでと幅広い。収集した資料の中には劣悪な環境下で放置されていたものも多く、記録内容を判読するために泥やカビの除去や経年劣化の修復作業を要する。また、収集した資料によって再生機器が異なるため、彼のラボには世の中に出回っているほぼすべての記録媒体を再生するための機器が整っている。再生機器の有無は視聴覚資料が消失する大きな原因となるため、修復した資料はデジタル化を行っているが、デジタルフォーマットの資料が100年後どのような変化を遂げているか分からないため、資料保存の観点からオリジナル資料を保存することが重要視されている。フィルムなどの実体を持つ資料と、実体を持たないデジタル資料のどちらが長期保存に適しているかという問題については、研究者の間でも難しい問題とされているようである。

Harris 氏の専門分野は、私の興味のある分野と直接関係してはいなかったものの、ライブラリーフレンドという身近な関係でコミュニケーションをとることができたため、プログラム中の説明では紹介されなかった彼の経験についても聞くことができ、彼の専門分野に興味を持つきっかけにもなった。研修参加者によっては、初回のランチタイム以降一度も交流をしなかった人もいたが、Harris 氏の気さくな人柄のおかげで図書館に関する話題以外でも盛り上がる事が多く、研修参加者の中でも一番親密な関係を築くことができた。



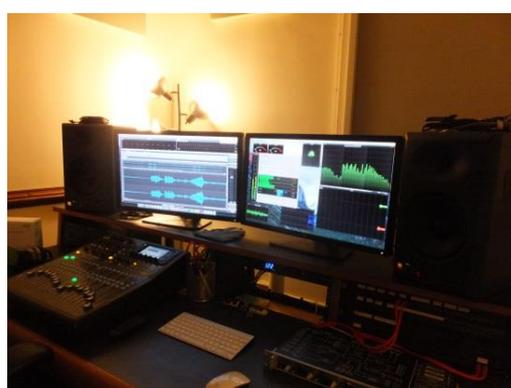
劣化した記録媒体。この状態から記録内容を判読できる状態にするため処理を行う。



様々な記録媒体に対応するために集められた再生機器。学内外から人づてに収集したもの。



ビデオ等の映像資料をデジタル化するための機器。室内には再生用のデッキが複数台置かれている。



レコード等の音声資料をデジタル化するための機器。音響機器が充実しており、室内は防音処理が施されている。

### ③ - 2 研修参加者との交流

研修参加者とは、プログラム外でも一緒に食事をしたり、週末にバスで外出することがあったりと親しい関係を築いていたが、その中でもとりわけルームメイトである Jeremiah Toogie M'boma 氏とは多くの情報交換ができたため紹介する。

## Jeremiah Toogie M'boma 氏

シオラレオネ出身の大学図書館員 (Njala University Library) で、専門分野は Information Science である。アフリカでは、図書館員 (Pure Librarian) になるために図書館情報学を 4 年間学ぶ必要がある。日本の司書資格について話すと、やはり海外から見ても珍しいケースのようであった。研修に参加した動機については、利用可能な情報量が増え、アクセス方法も多様化していく中で、情報提供者もニーズに対応できるよう変わっていく必要があることを強く感じており、海外の図書館の取り組み等の情報を収集することによって、自国の図書館を発展させたいと話してくれた。彼と話して感じたことは、図書館員としての誇りとプログラムに参加するにあたって持っている志の高さであった (プログラムの詳細を把握しているだけでなく、到着したばかりの大学の案内ができるレベルまで、個人で先行して見学を始めていたほどである)。また、どの話題を話す際にも、自国の文化や歴史に触れたうえで話していたことも印象的であった。この点は、研修中に彼がイリノイ大学で出会ったというコンゴ出身の友人ゴティエ氏も同様であった。彼らは自国の政府のリーダーシップについても触れることが多く、豊富な資源があるにもかかわらずガバナンスがしっかりしていないため自国が利益を得ることができないとも話しており、リーダーシップの重要性について身をもって感じていることがわかった。リーダーシップは今回の研修テーマでもあるため、彼にとってプログラムに参加することは大きな意味を持っているように感じた。

彼の大学 (Njala University) では、図書館を広く市民に開放しており、資料の貸出は行っていないもののデータベースへのアクセスや資料の閲覧を無料で許可している。その他、アウトリーチサービス的一种として市民に対して情報リテラシー教育を行っているが、企業への情報提供は彼の大学がイリノイ大学のように街の一部になっていて近隣に企業がないことから、特に行っていないとのことである。学生協働の取り組みについては、図書館員がレクチャーを行い、図書館で働ける人材を教育しているが賃金は支払っていないという。

シオラレオネでは、図書館員の専門性は高く図書館員を目指す人も多いようである。彼の大学では、図書館学を学んだ職員だけが図書館で働くことを許されている。また、大学として職員が図書館員になるためのサポートをしており、在職中に図書館学を学びたい場合、費用は実費だが休職期間中 (4 年間) も大学の給与は半額支払われる。そして、図書館学を修了した後は図書館で働くことを許され、図書館員は他の部署に異動することはないという。

彼の大学に限らず、アフリカ地域の図書館が抱えている大きな問題は、インターネット環境が整っていないことから生じる e リソースへのアクセス困難だということ。この点については、LibGuides のような Web 上で利用するツールを紹介された際に、オフラインでの使用可否を必ず確認していたことから分かった。また、政府が図書館の重要性をあまり理解していないためか、図書館が使える予算も少なく、現場の図書館員はサービスを拡張する重要性に気付いているものの動けない現状であることも知った。

研修最終日の前日に、彼から改めて日本の図書館について質問を受けた。質問の内容は「日本は米国と同じ先進国であるため、情報にアクセスするための技術や施設設備面での工夫、十分なサービスを提供するための資金も豊富にあると想像していたが、課題としてはどのようなものがあるのか」というものである。この質問に対して私は、研修中に紹介された施設や技術については日本ですでに普及しているものや、目にしたことがあるものも多くあったため、その点においては日米の違いを大き

く感じることはなかったが、資金調達と図書館員の専門性については大きな違いがあることを知り、同時にそれが日本にとっての課題だと認識したことを伝えた。資金調達に関して言えば、研修中に紹介されたほぼ全ての図書館が外部団体からの寄付金を運営費の一部にしているのに対して、日本の大学図書館は学生からの学費と補助金が主な収入源であり、外部団体から直接図書館に対して寄付を受けているケースは非常に稀であること、また大学図書館においては、図書館が資料費増額の必要性を訴えたとして必ずしも満足できる回答が得られるわけではないため、学内の部署に割り当てられた運営費のほかに外部から資金を調達する方法を考える必要性を感じていることについても言及した。図書館員の専門性については、米国の図書館員に限らず研修参加者全員が4年以上図書館学を学んだプロフェSSIONALであるのに対して、日本の大学図書館員は専門的な教育を受けていなくても部署配属されることがあること、また日本における図書館専門職である司書についても、図書館学を学ぶ期間は海外の図書館員に比べて圧倒的に短く、資格を持っていたとしても3~4年で図書館とはあまり関連のない部署に異動する可能性もあることが大きな違いであることを回答した。

### ③ - 3 Chai Wai: Libraries for Peace and Sustainability

本プログラムは、2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載されている持続可能な世界を実現する17の目標“SDGs (Sustainable Development Goals)”に関連するプレゼンテーションを研修参加者が行うというものであった。SDGsは、2016年から2030年までの国際目標であり、先進国、発展途上国を問わず世界各国が取り組むべき目標とされている。日本における取り組み事例や、SDGsの概要については外務省のホームページで紹介されている。また、SDGsで設定された各目標を図書館で実現するための方法を紹介したマニュアルがIFLA(The International Federation of Library Associations and Institutions)から発行されている。

このプレゼンテーションは、研修参加者が出身地域によって4チーム(アジア、中東、アフリカ、南米)に分かれて発表を行った。私はアジアグループとして、National Library of KoreaのSuyeon Lee氏とともにプレゼンテーションを行った。Lee氏との話し合いの中で、私立大学図書館と国立図書館では主な利用対象者や図書館が外部に対して行っている支援等の規模に違いがあることが分かったが、館種の違いにより生じるそうした差異は日本国内でも同様であることから、韓国と日本の図書館サービスにおいては共通する部分が多いことが分かった。一方で、他のグループ発表では社会的弱者に対するサービス事例が紹介され、国によって抱えている問題が多様であること、それに対する様々な改善策が講じられていることを知った。それぞれの図書館が異なるバックグラウンドを持つため解決すべき課題も異なるが、自分の属する地域だけでなく世界中の地域の図書館の活動を知ることで、図書館と社会との強い繋がりに気づかされるとともに、図書館の活動が世界平和にどのように関わることができるのかを知るきっかけになった。

外務省ホームページ

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/doukou/page23\\_000779.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/doukou/page23_000779.html)

## Libraries and the Sustainable Development Goals: A Storytelling Manual

<https://www.ifla.org/publications/libraries-and-the-sustainable-development-goals-a-storytelling-manual>

### 5. 米国図書館協会 (ALA) 年次大会

モータンソンセンター・アソシエイツプログラム終了後、6月21日～6月26日の期間、ルイジアナ州ニューオーリンズで開催された ALA 年次大会に参加した。今回の大会は Ernest N. Morial Convention Center をメイン会場とし、約2万5000人が参加してブース展示やセッションが行われた。6月22日には、オープニングセッションとして前米国大統領夫人である Michelle Obama 氏を招いたトークイベントが行われた。本イベントの司会は米国議会図書館 (LC) の館長である Carla Hayden 氏が務め、Heyden 氏の質問に対して Obama 氏が回答する形式で進行し、時にジョークを交えつつ始終にぎやかな雰囲気で行われた。会場の雰囲気は、日本の図書館総合展の大規模版という印象であったが、多くのブースがワインや食べ物、お土産グッズを提供していたことや、大勢の作家が自著を無料配布してサイン会を行っていた光景は新鮮であった。米国での開催ということもあり、出展していた企業は米国企業が大半を占めていた。ALA 年次大会は、入場するために費用を支払う必要がある点も日本の図書館総合展とは異なっている（私の場合は協会に負担していただいたが、セッションに参加したため約4万円を支払った）。出展ブースでは、資料のデジタル化するためのスキャナや本の自動貸出機のほか、Maker Space に設置するための3Dプリンターやレーザーカッター等の機器が多い印象であった。私は図書館におけるイベント運営や広報戦略について興味があったため、そのことに関連するセッションに参加した。内容については、以下のとおりである。



オープニングセッション会場の様子とインタビューを受ける Michelle Obama 氏。セッション開始前は、楽団によるコンサートが会場をにぎわせ、Obama 氏が登場すると会場は総立ちになって大きな拍手が送られた。

## ◆Branding Your Library: Reinventing the Library image

Tamiko Brown, Tania Castillo, Suzy Ferrell

図書館のブランディングを実現するためのアプローチについて、Twitter、Facebook、Instagram 等のソーシャルメディアを情報発信ツールとして活用することの利点について説明された。講演者の一人である Tamiko Brown 氏は、Ed White E-STEM Magnet School の学校図書館員であり、School Library Journal による School Librarian of the Year 2017 を受賞した経歴を持つ人物である。自館にて子どもが参加できる様々なイベントを実施し、その様子をソーシャルメディアで積極的に発信しているため、現場の図書館員として手軽に情報発信が可能で、費用がかからず、すぐに情報共有が可能なソーシャルメディアの利点を実感していることが伝わってきた。ブランディングの手法としては、スローガンやロゴマークの作成が効果的であり、例としてディズニーのロゴや Google のロゴ（検索のトップ画面に表示されるロゴデザインを頻繁に変えている）が紹介された。Brown 氏の学校図書館では、図書館のロゴを生徒に描かせて、一番良いデザインを考えた生徒に本をプレゼントするイベントを開催している。発信する内容に困った場合は、利用者から直接アイデアを募るのも効果的な方法だという。このセッションで講演者が伝えたかったメッセージは、図書館が良い取り組みをしても、その情報を発信しなければ利用者には気付いてもらえないということであり、多くの図書館が抱えるこの共通課題に対して効果的なツールであるソーシャルメディアをより身近に感じてもらうことを目的にしていた印象であった。そのため、セッション中には参加者が自分たちの図書館で今年行った取り組みのうち一番よかったことや、セッションの感想を Twitter に投稿する時間を設けるといった工夫もされていた。なお、このセッションのスライドは Web 上で公開されている。

セッションスライド

<http://makerspacelibrary.blogspot.com/?m=1>

## ◆ポスターセッション

モーテンソンセンターの研修担当者である Clara M. Chu 氏より、ALA のポスターセッションに出展予定であることを知らされていたため見学に向かった。ポスターは 2 種類出展されており、いずれも“Libraries For Peace (L4P)” についてのものであった。この活動は前述の Chai Wai とも関係しており、図書館の活動を通して世界平和を実現する方法を考えるものである。また、L4P の活動内容のひとつとして“Empowering Your community with CLIA (Community-Library-Inter-Action)” というものが紹介されていた。この活動は、図書館が自分たちに身近なコミュニティの人々を集めて、自由にコミュニケーションをとる機会を提供するというものである。Chu 氏が体験した事例の一つとして、南アフリカの University of Cape Town での活動を紹介された。この時に起きた出来事で印象的だったのは、職を求める人と人手の足りない企業のマッチングが成立したことであったという。Chu 氏からは、この活動を大学図書館として行うのであれば、教職員と学生を集めてみたら面白いかもしれないというアドバイスもいただいた。

モーテンソンセンターのポスターの他にも様々な活動が紹介されていたが、その中でも驚いたのは日

本人による出展があったことである。出展は「ビジネス支援図書館推進協議会（JBLA）」によるもので、プレゼンターは慶應義塾大学の名誉教授である田村俊作氏が担当されていた。出展内容は「まちゼミ」の活動に関するもので、活動内容は商店街で働いている店員が自分たちの店に関する専門的な知識を地域の人々に教えるというものである。この活動に対して図書館は、背景知識に関する資料やプレゼンテーションの手法に関する資料の紹介、関連トピックの特設コーナー作成、店頭での読み聞かせといった支援を行っている。同ポスターでは、事例として調布市立図書館（東京都）と川崎市立図書館（神奈川県）の活動が紹介されていた。私が田村氏から説明を受けていた際にも続々と見学者が訪れ、興味深くポスターを見ていたのが印象的であった。研修の1ヶ月間、図書館界での日本の存在の小ささを痛感していたため、この経験は日本人として誇らしく感じた。

同大会については帰国後に田村氏のご紹介で、国立国会図書館が発信しているメールマガジン「カレントアウェアネス-E」の事務局より記事の執筆依頼をいただいた。執筆した記事は現在 Web 上で公開されている。



「まちゼミ」のポスター写真。活動の概要やステップなどが図示されており、非常にわかりやすい。

REPORT FROM JAPAN Turning a Shopping District into a Community Learning Space

2018年 ALA 年次大会

<https://2018.alaannual.org/>

Ed White E-STEM Magnet School

<http://edwhite.ccisd.net/>

ビジネス支援図書館推進協議会（JBLA）

<http://www.business-library.jp/>

カレントアウェアネス・ポータル

<http://current.ndl.go.jp/e2054>

## 6. おわりに

約 1 か月という長期間の研修参加は、海外渡航経験のない私にとっては期待とともに大きな不安を伴う挑戦でもあった。母国語の通じない国で生活し、異文化で暮らす人々と過ごす中で文化の違いを感じることもあったが、それ以上にコミュニケーションをとることができたことに対する喜びが大きく、充実した時間を過ごすことができた。研修に参加するまでは、米国が図書館先進国であることを知っていたため、すべての面で日本よりも優れたサービスを展開していると考えていたが、デジタル化の技術や情報アクセスの仕組み、施設・設備面での工夫という点に関しては、日本においても同水準といえるものが多くあったため、必ずしも負い目を感じる必要がないことを知る機会にもなった。ただし、資金調達の方法や図書館員の専門性については、日本がクリアすべき課題であることを強く感じた。とりわけ、日本と海外の図書館員の専門性の違いについては、過去に参加した司書講習での講義や他の機会に話題になることがあったが、実際に海外の図書館員から話を聞くことでその違いを実感することになった。研修中に出会った図書館員は、セッションやワークショップの担当者として自分たちの前に立つ姿を見た際には遠い存在に感じていたが、ALA 年次大会で自分と同じように展示ブースを見学する様子を見かけた時に、彼らも自分と同じように現場で働く図書館員であることに気づき、利用者に対してより良いサービスを提供することが全ての図書館員が持つ共通のミッションであり、図書館業界は現場で働く図書館員が自らの経験を積極的に発信することで助け合いながら成長してきたことを感じた。研修中はセッション等の内容が参考になったことはもちろん、研修参加者から出た質問によって各国が抱える問題を知ることができた。また、資金面の問題がプログラムおよび ALA 年次大会参加への課題になっていることも知り、海外派遣研修として私立大学図書館協会に費用をすべて負担していただいたことが大変ありがたいことであることを実感した。

今回の研修参加は、図書館先進国である米国で海外の図書館員と共に専門的な知識を学ぶという、国内では味わえないたいへん貴重な経験であった。日本を除く 8 か国もの国々で生活する人々と共に過ごした時間は、通常の留学経験よりも遥かに国際色の濃い経験であり、図書館員としてだけでなく一個人の人生経験としても忘れられないものとなった。今後も、研修を通して築いた国際的なネットワークを大切にしたいと思う。

### ※謝辞

今回の研修への参加は、多くの方々のサポートがあってこそ実現したものであることを強く感じております。私立大学図書館協会国際図書館協力委員会の委員長を務められている南山大学図書館の稲垣様には、研修開始の半年以上も前からモーションセンターとの調整や私の質問に対して真摯にご対応いただき、前回のプログラム参加者である早稲田大学図書館の藤様には、研修参加にあたってのアドバイスをいただきました。その他、日頃からお世話になっている丸善雄松堂株式会社のご担当者様のご厚意により、ALA 年次大会の登録に関する相談に乗っていただいたことや、同時期に実施された海外研修ツアーの参加者と交流する機会を設けていただいたことも大変ありがたく感じております。そしてなにより、少人数体制であるにもかかわらず快く研修参加を認めてくださった本学職員の協力がなければ、無事に研修を終えることはできませんでした。最後になりますが、今回の研修で私を支えてくださったすべての皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

以上